

※以下は、私の勤務先の関係者たちに送ったメール内容の一部です。

○夏の終わりのニュージーランド（南島のクライストチャーチ）から、現地到着のご挨拶を申し上げます。ニュージーランドへは、今回で17度目の訪問となります。こちらは来週まで夏時間（ディセービング）が続いているため、日本より4時間、進んでいます。つまりは、日本のお昼が、こちらの午後4時になります。現在、夕方の7時ですが、外は、まるでお昼頃のような明るさです。

—中 略—

○成田空港からの直行便で、本日（24日）、早朝にクライストチャーチ（CHC）に着くと、紫外線の強力な光に出迎えられました。夕方になるとオレンジ色のキラキラした感じになり、誇張なく、前の車が見えないほどです。南極の上のオゾン層が破壊されているためです。

○CHCでの宿泊場所は、これまで何度も泊まったことのある YMCA です。私の部屋は最上階の5階です。イギリス式に、1階はグランドフロアと称するため、5階は実際には6階になります。

○さっそくに、4年前の2月22日に生じたCHCの大地震によって崩壊した大聖堂に行ってみました。大聖堂は当時のままで保存されています。しかし聖堂の後部は表面上は無傷でした。やがて大修復が行われるのかもしれませんが。これまでCHCに滞在しているときには、いつも夕方に行われる聖歌隊の美しい歌声を聴きに、この大聖堂に行きました。日曜日の礼拝も、この教会でした。アングリカン・チャーチ（英国国教会）です。

○大聖堂の周辺は、まるで別世界のような更地の風景が広がっていました。大聖堂近くのビルの1階にはカトリック教会があり、毎日、お昼から30分間の御ミサが行われ、私もしばしば参加しました。その他、思い出深い多くの建物の、ほぼすべてが更地になってしまいました。これほどまで被害が大きかったとは思いませんでした。

○あすは、日本人の建築家によって設計された「ペーパー・チャーチ（紙パルプで造られた教会）」に行き、その近くあった語学学校の跡地へも行ってみたいと願っています。ここで多くの日本人（語学研修生たち）が犠牲になったからです。

○大地震が生じた、ちょうど、その頃、私は首都であるウェリントンに来ていました。そして大学のホームページに掲載するために、悲しみに沈むニュージーランドの様子を報告しました。日本のレスキューチームの様子もテレビで紹介されました。

○そうした私は、3月11日をニュージーランドで迎えたのです。それ以来、私自身の「心の時計」は、まるで止まったかのようでした。それゆえ、「心の時計」を動かすためのCHC訪問は、私の悲願となりました。今回、ようやくにしてCHCに来ることができ、感慨深いものがあります。

—中 略—

○それでは、これで失礼します。

---

○連日、クライストチャーチ（CHC）の市街地を歩き回っていました。2011年2月22日に生じたカンタベリー大地震により、私の予想を遙かに超えたダメージを受けたことが分かりました。それと同時に、再開発に向けたエネルギーの力強さを感じます。

○毎夕、YMCA から徒歩で20分あまりの場所に建てられた大聖堂（の代替教会）で行われる聖歌隊による賛美礼拝に出席しています。この教会は日本人建築家による設計で、外壁は強化プラスチックでできています。

○その教会の横には、今回の大地震でビルが崩壊したため、多くの日本人の語学研修生たちが亡くなった跡地が、ささやかなメモリアルプレイスとして残されています。私は毎夕、教会に行く前に、この敷地内に設置されている献花台の前で御霊（みたま）の安らかならんことを祈りました。

○今日は日曜日でしたので、朝の礼拝と夕拝の2度、この場所に佇むことができました。見ると、何人もの人たちが黙祷を献げていました。

○夕拝の帰路、ビクトリア広場を通ると、巨大スクリーンでクリケットの試合の様子が映し出され、多くの人々が歓声を上げていました。それを見て安堵しました。

○そういえば、1992年のクリスマスシーズンをCHCで過ごしたことがありました。ビクトリア広場には数多くの市民が集まり、灯りをともしながら、1時間あまり皆でクリスマスソングを歌いました。静かな歌声が広場に響きました。それは実に荘重なる光景でした。

○ビクトリア広場のそばにはタウンホールがあります。あるとき、3週間あまりCHCに滞在したことがありました。毎週土曜日には、このホールでオーケストラのコンサートが開催され、行きました。このホールも修復を待っている状態です。

○余談ですが、私が最初にCHCを訪れたのは1989年の、ちょうど今頃でした。1NZ\$を献金して、大聖堂のらせん階段を上ってCHCの市街地を見渡しました。たしか当時は、この大聖堂のタワーよりも高い建物はなかった（建設が許可されなかった）と記憶しています。

○多くは8月の「真冬」の時期にCHCを訪問したため、毎朝、レンタカーの窓には霜が付着していました。テカポ湖の帰りに激しい雪に見舞われたりもしましたし、アカロアという港町まで行ったときも、思いの外、峠が険しくて車がスリップしないかとドキドキでした。郊外にある、聴覚制約児たちの特別支援学校を訪問したときは、寒さにブルブル震えながら帰りのバスを待っていました。9月下旬にCHCにいたときには、ハグレー公園に桜が咲き始め、その美しさに感動しました。

○毎日、広大なハグレー公園を散歩し、途中のティールームでお茶を飲みました。今は大量のドングリと栗が落ちています。公園の向こうにモナベイルという建物があり、数多くの観光客が訪れます。そこからパント（小舟）がスタートします。しかし、その建物も修復を待っています。そのため、パントも休業状態です。

○このようにCHCには数多くの思い出が詰まっているのです。しかし、今はまるで別の街のようになってしまいました。ハグレー公園とエイボン川だけが、何事もなかったかのように静かに佇み、透き通った水が流れています。そして私もまた、毎日、公園を散歩し、ティールームでお茶を飲みました。

○さあ、あすは空港でレンタカーを借りて、懐かしのテカポ湖まで移動します!

---

## テカポ湖の水力発電

2015年04月06日

○昨夕、ニュージーランドのクィーンズタウンから、オーストラリアのメルボルンに到着しました。これからメルボルンでの生活が始まります。

○メルボルン空港から乗ったタクシーの運転手さんはパキスタン人で、宿泊施設のフロントスタッフは、バングラデシュ出身者とチェコスロバキア出身者です。それぞれ特徴的な発音の英語を話します。多民族・多文化都市であるメルボルンの一端に触れて感動をおぼえています。

○さて、テカポ湖周辺には水力発電所があります。高低差を利用して、タスマン海に流れ出るまでに、計8回の水力発電が可能となるとのこと。言うまでもなく、ニュージーランドは1987年に非核法を制定した国なのです。

○テカポ湖には、もう10回以上、訪れました。石造りの「善き羊飼いの教会」もそのままでした。この地域はマッケンジー地方と言うのですが、厳しい風土の中、先人たちは石造りの教会を建て、開拓に勤しんだのです。ニュージーランドは自然と共に歩んできたのです。

---

## クライストチャーチのこと

2015年04月13日

○オーストラリアの滞在許可（ビザ）の取得は、非力な私にはとても難しく、4月1日までに取れるかどうか不安をおぼえました。そこで、まず最初にニュージーランドに行こうと考えました。ニュージーランドの場合は3ヶ月間はビザが不要だからです。いずれにせよ、クライストチャーチ（CHC）で生じたカンタベリー大地震からの復興の様子を調べたいと考えていたため、都合が良かったのです。

○そこで調べてみると、日本からCHCまでの直行便が見つかりました。季節限定で、週に1便程度でした。その中でも6万円を切る、安いチケットが確保できました。

○ニュージーランドの玄関口はオークランドです。しかし国際線と国内線のターミナルが離れており、移動が面倒だったのと（と言っても、連絡バスで数分の距離ですが）、搭乗手続きの煩雑さを避けたい、との思いがありました。そこでCHCまでの直行便にしたのです。なにせパソコンを4台も持ち運んでいたからです。セキュリティ・チェックのため、搭乗手続きの際に、いちいち全部のパソコン等をバックから出さなくてはならないからです。

○今は便利になって、ニュージーランド航空のサイトから事前に座席指定もできます。「空席があるといいなあ・・・」と思って訊くと「Not busy!」とのことで、3席分を、まるまる使うことができました。12時間のロングフライトも、好きな映画を3本、観て、少し眠るとCHCに到着しました。

○CHCでの私の定宿である YMCA は、とてもお薦めです。安いしフレンドリーだし、スタッフが実にアバウトだからです。(笑)

○まるで天井裏のような部屋ですが、これでデラックス・ルームなのです。ドミトリー&バックパッカーも兼ねているため、大きなリュックを背負った世界中の若者たちや、「気分は若者たち」が数多く宿泊して

います。

○部屋には何とイスがありません。これではパソコンが打てません。そこで「イスを、お願い!」と言うと、どこからか運んできました。しかし机がないため、テーブルの前の扉を開けて何とかパソコンが打てるようにしました。実に楽しいですね!

○オーストラリアもそうですが、エレベーター（イギリス英語のためリフト）だって、早い者順です。クリーニングスタッフだからと言って、宿泊客に遠慮などしません。ますます楽しいですね!

○YMCA の近くにはエイボン川とハグレー公園、そして博物館があり、ほぼ毎日、博物館の2階のティールームでお茶を飲んでいました。ちなみに入館料は無料です。あ、これも英国式で、1階をグランドフロア（G）と呼ぶため、2階は、実際は3階になります。

○夏の終わりの南半球での生活が、こうして始まりました。

---

## 入国審査&両替のこと

2015年04月18日 | 日常生活

○ニュージーランドとオーストラリアへの入国の際に懸念していたことがあります。それは入国審査です。その中でも持ち込み品と所持金のことでした。

○今までは「申請項目に該当せず!」だったために、パスポートコントロールを経た後に、そのまま荷物を取り、外に出てきました。しかし今回は長期間ということもあり、正直に申告して、スーツケースも開けるつもりでいました。特にその中でも治療薬の持ち込み審査が通るかどうかが、不安でした。薬の英文説明書を印刷し、そこに医師のサインをもらったりもしました。さらには制限額を超える現金を所持していたため、その金額も正直に申告しました。

○余談ですが、これまで2度、麻薬犬のチェックに引っかかったことがありました。シドニー空港とオークランド空港でした。小型の麻薬検知犬がピョン&ピョンとスーツケースの上を飛び回り、下に置いたバッグ等の周りを走ります。と、ピタッと私の荷物の前で止まったのです。荷物を開けてチェックをしました。幸い、見つからずに済みました。あ、もともと何も入っていなかったのに「幸い」の意味を取り違えないでください。検査官が「リンゴと、ある麻薬の臭いが似ているためだろう」と言っていました。確かにリンゴを買ったときに、入れてあったのです。但し、食べ物は機内に持ち込めないため、もちろんバックにリンゴはありませんでした。リンゴの臭いが残っていたのです。もう一度は忘れましたが、同じく荷物検査をしました。

○ところが、です。両国ともスーツケースを開けることはなく、所持金も係官が代筆してくれたため、スムーズに入国できました。ニュージーランドでは「自分たちは警察ではないから心配しないで..」と言いながら、「正直に申告してくれてありがとう!」とまで言われてしまい、何だか張り詰めていた気持ちが萎（しぼ）んでゆくのを感じました。（笑）

○さて、これまでもそうでしたが、各種の支払いは、基本的にクレジットカードで行います。さらに今回は、JTBとセゾンが発行しているキャッシュカード（それぞれ「MonetyT Global」と「NEO MONEY」）を用意してきました。日本国内で入金し、国外のATMで引き出すための国外専用カードです。ちなみに、今ではトラベラーズ・チェックは日本国内では購入できないため、今後、このキャッシュカードの利用が増えてゆくものと思います。

○それでも、このキャッシュカードの場合は、1回あたり、日本円で10万円しか引き出すことができず、また、引き出すたびに手数料がかかることを考えたら、できるだけ日本円（現金）を持参し、必要に応じて両替をした方が良いのでは、と考えたのです。もちろん両替の際にも手数料がかかりますが。。

○メルボルン市内には数多くの両替の窓口があり、それぞれ店頭には各国のレートが表示されています。しかしそれだけではなく、実は両替ショップによって手数料が異なるのです。そのため、少額の両替を試みて、換算率の良いショップを選択した方が賢明であることに気づきました。参考のために、さほど時間（30分ほど）を置かず別々の両替ショップで、それぞれ1万円を換金したときの結果をお伝えしますと、ひとつは AU\$85.60で、もうひとつが AU\$90.04でした。つまりは1万円の両替で500円ほどの差が出たことが分かります。う〜ん、勉強になるなあ！

---

## テムプルトン・センターのこと

2015年04月24日 | ニュージーランド

○日本を離れて1ヶ月が経ちました。

○3月30日に YMCA（クライストチャーチ）をチェックアウトして空港に行き、レンタカーを借りて、1週間で1,600キロあまりを走りました。

○クライストチャーチ空港から30分あまり走った郊外に、テムプルトン（Templeton）という小さな集落があります。かつてはここにテムプルトン・センターという大規模収容型福祉施設がありました。1995年頃から2000年頃まで、私は毎年、この場所を訪れました。「Deinstitutionalization」の実態を継続的に調査する目的でした。

○発音すると舌をかみそうな、この言葉は「施設解体閉鎖」を意味しています。日本では、この単語を「脱施設化」と称していましたが、これは間違いです。脱施設化とは「施設を施設らしくなくする」、つまりは個室化を進めたり、食事のメニューが選べたりといった居住環境の改善を意味するからです。ゆえに、施設解体閉鎖とは明確に異なります。

○かつて、このテムプルトン・センターには1,000名を超える重度の機能的な制約状態を有する人びとが生活していました。ヴィラ（Villa）と称する建物が広大な敷地内に点在し、特別支援学校やスイミングプール、さらには礼拝堂もありました。入り口を示す画像には「Templeton Centre」の文字がはめ込まれていました。

○私は、このセンターが次第に縮小しながら居住者たちが地域生活に移行してゆくプロセスを継続的に調べてきたのです。ちなみに、ここから車で10分ほどのところには、女性・男性、それぞれの刑務所があります。つまりは、そうした位置づけであったということです。ニュージーランドでも長い間、こうした隔離政策がとられていたのです。

○結論を言えば、2007年をもって、ニュージーランドではすべての大規模収容型福祉施設が解体閉鎖されました。

○しばらくぶりにセンターがあった場所を訪れてみると、プールや礼拝堂の建物は、まだ残っていました。ただし、今でも活用されているのかどうかは定かではありませんが。。そして敷地内には中等学校や特

別支援教育機関の建物が立ち並んでいました。

○「これまでニュージーランドに17回も来た!」と言うと、驚く人がいますが、つまりはこうしたことをコツコツと調べてきたのです。むろんのこと、このプロセスを通して、わが国の施設解体閉鎖に寄与したい、との願いからでした。

○私は「インクルージョン研究」のテーマで10年間、社会福祉学会で継続的に報告をしてきました。そしてそのことを「インクルーシヴ社会構築」と称してきました。最初は「インクルーシヴ社会形成」と言っていたのですが、やがて「構築」に落ち着きました。その後、どういう経緯かは分かりませんが、わが国政府（内閣府）もこの表現を使うようになりました。偶然とはいえ、この表現が認知されたことを嬉しく思います。

○これも結論を言えば、わが国の大規模収容型福祉施設の解体閉鎖を図るには政府の政策理念次第です。ニュージーランド場合、そこが優れていたのです。そうやってしまうと脱力感のみが残りますが、私自身は、わが国の政府や政治家たちに決して失望はしていません。小さき変化ですが、間違いなく良き方向性に向かっているからです。当面の試金石は、原発再稼働の方向を取るのか否か、なのですが、さて。。

---

## ミラー湖

2015年05月13日 | ニュージーランド

◇ニュージーランドの南島にミルフォードサウンド (Milford Sound) という景勝地があります。小さな湖畔の街であるテ・アナウ (Te Anau) から、車で2時間ほどです。

◇その途中にミラー湖 (Mirror Lakes) があります。その名のごとく、鏡のように美しい湖面を誇っています。

◇四月初旬に、20数年ぶりに、この湖を訪れてみました。遊歩道が整備されていたりして、以前のような素朴な雰囲気とは異なっていました。

◇私のふるさとには阿寒国立公園があり、そこに「神秘の湖」と称される摩周湖があります。晴れ間が少なく、霧の摩周湖などと称されたりもします。

◇ミラー湖も同じで、風が吹いたり、雨が降ったり、曇っていたりすると、なかなかクリアな湖面を眺めることはできません。しかも水鳥がスイスイと泳いでいたりするため、さざ波が立ち、余計に難しくなります。

◇午前中は、まあまあ美しい湖面を眺めることができましたが、午後に再び立ち寄ったときには曇り空に変わり、風も出てきたために「・・・」でした。こうしたところが、あらかじめ立ち寄る時間帯が設定されている観光客にとっては難しいところです。

◇ところで、今でも売られているのかどうかは定かではありませんが、霧の摩周湖へ行くと、摩周湖の霧が入った缶が売られていました。でも、どうやって霧を入れたのでしょうか？